日新電機「石村亭」（旧「後の潺湲亭」）訪問記

――平成十八年度大学院研修とその後の調査より――

清水康次
齊藤美紗
武田美穂

はじめに

谷崎潤一郎の京都での邸宅の一つである「後の潺湲亭」が、日新電機株式会社によってかつての姿のままに保存されており、見学が可能であると知ったのは、平成十八（二〇〇六）年一月三十日の『朝日新聞』の記事によってであった。

作家谷崎潤一郎（1886～1965）が8年近く暮らし、「鍵」など数々の作品を執筆した京都市左京区の「石村亭」（元潺湲亭）が今秋にも一般に公開されることになった。この家で過ごした期間は、谷崎が生涯に住まいとした40軒以上の中で3本の指に入る長さ。一時は永住を考えるほど気に入っていたという。所有者の重電機器メーカー、日新電機（同市右京区）が谷崎の言葉を守り、当時のまま保存してきたが、購入50年を機に公開を決めた。

新聞記事は、「石村亭」の所在やたたずまいを伝えた上で、「商家の隠居所として1907（明治40）年ごろ建てられた家で、谷崎が「49年4月～56年12月の63歳から70歳までを、ここで過ごし」、「鍵」「少将滋幹の母」「潤一郎新訳源氏物語」等が生まれ、「夢の浮橋」では「主人公らの住む家のモデル」になっていることを紹介している。

松子の同級生の夫が日新電機の役員を務めていた縁で56年12月、同社に売却。谷崎は「石村亭」と改名、「なるべく現状のまま使ってもらいたい」と言い残した。去る時には「次には旅行者として見ることになる」と寂しげに言い、転居後も何度も訪れたという。同社は庭の手

入れなどに年間数千万円をかけ、建物を荒らさないために社の迎賓館として年に数回程度使用するだけにとどめてきた。

兵庫県芦屋市の谷崎潤一郎記念館によると、谷崎が一定期間住んだ建物で現存するのは、神戸市東灘区の「倚松庵」（90年に移築）や静岡県熱海市の「後の雪後庵」など数少なく、石村亭は倚松庵、後の雪後庵と並んで長く住んだという。

『朝日新聞』の記事は、「石村亭」の外観・内部の写真や谷崎夫妻の写真なども掲げた、かなり詳しいものであった。問い合わせてみると、「一般に公開」は正確ではなく、あくまでも限定的な公開ということであったが、研究が目的であれば、少人数なら受け入れるという答えをいただき、本学大学院の平成十八年度の研修として見学を申し込んだ。

平成十八（二〇〇六）年十二月二日を研修（見学）の日とし、それに先立って事前訪問をし、また事前調査をして、院生の齊藤美紗・武田美穂が『「谷崎潤一郎と京都」研修資料』を作成した。以下の文章は、清水康次が、その『研修資料』を参照しながら書き直し、形を整えたものである。「石村亭」は、谷崎潤一郎を偲び、その文学を考える上で貴重な施設・資料であるにもかかわらず、まだ紹介される機会が少ない。この『研究報告書』に紹介することで、周知の一助となればと思う。ただし、建物の構造や施設の詳細についての説明は、「石村亭」のパンフレットをはじめ、たつみ都志『ここですやろ谷崎はん　潤一郎・関西の足跡』（一九八五・三、広論社）、河野仁昭『谷崎潤一郎の京都を歩く』（二〇〇五・一〇、淡交社）があるのでそれらに譲り、ここでは、「後の潺湲亭」という邸宅を通して、谷崎の京都での生活を浮かび上がらせていくことをめざしたい。

なお、日新電機株式会社と「石村亭」の管理を担当されている同社の井上昌幸氏には、御好意と寛大なご配慮をいただいた。ここに感謝の意を記しておきたい。

一　「前の潺湲亭」

谷崎潤一郎は戦後京都に在住し、京都での二つの住まいに「潺湲亭」の名を与えている。現在では、二つの住まいのうち、最初に住んだ南禅寺下河原町の邸宅を「前の潺湲亭」、次に住んだ下鴨泉川町の現「石村亭」を「後の潺湲亭」と呼びならわしている。

生涯に四十回以上転居したという谷崎の転居癖は有名であ

るが、京都には、これ以前にも、関東大震災での被災の直後に住んだことがある。大正十二（一九二三）年十月に住んだ上京区等持院中町十七番地の居宅があり、同年十一月に住んだ左京区三条東山通の要法寺の塔頭がある。

さしあたり京都の牧野省三氏を頼つて等持院のマキノキネマの撮影所の近所にさゝやかな借家を借りて貰つた。そしてそこに二三箇月ゐるうちに、三条川東の日蓮宗の本山要法寺の塔頭が一箇寺空家になつてゐるのを見つけてそれを借りたが、そこも二三箇月しか住まないで、阪神間の六甲苦楽園に移り、……

（「三つの場合」一九六〇・九、十一、六一・二、『中央公論』）

このときの京都在住の短さについて、「ラジオ漫談」（一九五三・一『毎日新聞』）では、「京都で迎へる初めての寒さに辟易して」と語っている。以後約二十年、阪神間での生活が続くが、この間に、千代子夫人との離婚、古川丁未子との結婚と離婚、さらに森田（根津）松子との結婚と、めまぐるしい変動があり、その激しい刺激の中で、「痴人の愛」「卍」「蓼喰ふ虫」「吉野葛」「蘆刈」「春琴抄」、さらには「潤一郎訳源氏物語」等の代表作を次々と発表していく。

戦争中は熱海、津山に疎開していたが、敗戦を機に改めて京都に居を求める。京都市上京区寺町通今出川上ル五丁目鶴山町の中塚せい方に身を寄せた後、昭和二十一（一九四六）年十一月、左京区南禅寺下河原町の家（「前の潺湲亭」）に転居したが、この間の様子を記した文章として、「「潺湲亭」のことその他」（一九四七・一、『中央公論』）がある。しばらく、この文章をたどっていきたい。

谷崎は、まず、戦争中「あけくれ京の名所図会の挿絵を見つゝわづかに憂をなぐさめてゐた」といい、「東京が焼かれ大阪が焼かれ出してからは、京もいづれは同じ運命に陥ることゝ思」うと、「ひとしほ名所図会の挿絵がなつかしさを増して来る」と、そのころ心を占めていた京都への憧憬を語っている。「私は京の生れではないけれども京好きの点では京都人に劣らない」と自認し、近世の京の文人たちを偲んで、「いかにこまやかに京の生活を享楽してゐたか」を想像していたという。この時期に、谷崎の心の中に、京都への憧れが、深く強く蓄積されていったことが知られる。

そして敗戦。京都は戦火をまぬがれ、ほとんど無傷で残った。「永久に過去の幻となつてしまつたもの、たゞ名所図会の上でばかり見られるものと思ひあきらめてゐた京の街が、そつくり戦前の姿のまゝで残つたと云ふことを聞くと、それ

が又私には夢のやうに感じられた」。京都在住への思いは、動かしがたいものとなる。昭和二十一（一九四六）年、「三月にひとりで京へ出」、「五月の末に家族たちをも呼び迎へて、兎も角も寺町今出川に当座の間借りをし」、「八月の上旬に知らしてくれる人があつて南禅寺の家の話をきめることが出来た」。それが「前の潺湲亭」である。

その家は、南禅寺の門前から永観堂や若王子の方へ行く道にあつて、うしろに白川が流れてゐ、一番奥の八畳の間は水に沿うて建てられてゐて、窓の下をゆくせゝらぎの音がすわつてゐてもしめやかに聞えた。（中略）窓の外には絶えず白川の水の音がした。ふと私は、此処に住んでこの家を「潺湲居」と呼んだら、などゝも思つた。（中略）「潺湲居」より「潺湲亭」の方がよくはないか、（中略）私の眼には「潺湲亭」と刻した印や額の文字までが見えて来た。もしその文字を頼むとしたら誰がよからう。印は中国の銭瘦鉄氏に彫つて貰ひたい……

銭瘦鉄（一八九五～一九六七年）は中国の画家・篆刻家。上海在住時代に橋本関雪と出会い、大正十二（一九二三）年には、関雪の「白沙村荘」に住んで活動した。「白沙村荘」は、関雪が大正五年に完成させた広大な庭園を持つ邸宅で、

離れ（書斎）の玄関の扁額

離れ（書斎）の屋内の扁額

現在は「白沙村荘　橋本関雪記念館」として維持運営されている。銭瘦鉄と関雪とのかかわりについては、西原大輔『ミネルヴァ日本評伝選　橋本関雪』（二〇〇七・一〇、ミネルヴァ書房）に詳しい。瘦鉄は、日本において、会津八一や谷崎潤一郎らの文学者とも親しく交流したが、日本の侵略に抗議して拘禁され、上海に帰る。戦争の終結とともに日本との交流を再開し、谷崎は、このとき「銭瘦鉄氏が中国代表の一員となつて目下東京に滞在してをり、十月末には京にも来ると云ふ報せ」を受けたという。

谷崎は、瘦鉄に「「潺湲亭」の篆刻と額の揮毫を依頼」し、快諾を得る。京都へやってきた瘦鉄と再会し、旧交を温める。瘦鉄は、昭和二十（一九四五）年二月に亡くなった橋本関雪を偲び、「白沙村荘」で「潺湲亭」の文字を揮毫した。この扁額は、後述するように、今も「石村亭」の離れに掲げられており、玄関の行書体のものと、屋内の篆書体のものと二つある。玄関の額には、「潺湲亭」という文字に、「丙戌秋日為／谷崎吾兄題／於白沙邨荘／瘦鉄」と付記があり、屋内の額には「谷崎道兄／属題銭厓」と記されている。瘦鉄の揮毫の経緯は、昭和二十一（一九四六）年十月二日付の土屋計左右宛の書簡（『谷崎潤一郎全集』第二十五巻（一九八三・九、中央公論社））からも確認される。

「潺湲」の語は、水の流れるさまの形容であり、川のせせらぎの音をいう。「わが庵は永観堂の西二丁若王子みち白川の岸」と谷崎が歌った「前の潺湲亭」では、背後を流れる白川のせせらぎの音を指し、その名を引き継いだ「後の潺湲亭」では、鴨川やその支流の泉川の川音、また、その水を引き入れた邸内の庭園の水音がそう形容されている。

この「潺湲」の語は、種々の文学作品に用いられる。谷崎が偲んだ京都の近世の文人では、中島棕隠の「鴨東四時雑詞」に鴨川の形容として使われている例がある。

豪華万種付潺湲、即是我都銷夏湾、恰恰連宵無一雨、綺紈絡繹不知還。

豪華　万種　潺湲（鴨川の流れ）に付す。即ち是れ我が都の（おらがみやこの）銷夏湾（唐土の涼み場）。恰恰（あたかも時節柄として）　連宵　一雨無く（一粒も降らず）、綺紈（女たちの美しい夏物）絡繹として（行き交って）　還ることを知らず。

（斎田作楽編著『鴨東四時雑詞註解』一九九〇・九、太平書屋）

「鴨東納涼の夜遊、六月七日より十四日に至り、最も盛んなり」という、四条河原の夏の夜のにぎわいを描いている。

この漢詩の後には、四条橋の南北に床や茶店が立ち並んでいる様子が文章で綴られている。

明治以降では、漱石の「虞美人草」（一九〇七・六～一〇）に、鴨川の上流である高野川の流れを形容した例がある。

春はもの、句になり易き京の町を、七条から一条迄横に貫ぬいて、烟る柳の間から、温き水打つ白き布を、高野川の磧に数へ尽くして、長々と北にうねる路を、大方は二里余りも来たら、山は自から左右に逼つて、脚下に奔る潺湲の響も、折れる程に曲る程に、あるは、こなた、あるは、かなたと鳴る。

「虞美人草」の冒頭で、甲野と宗近が連れ立って、八瀬大原を経て比叡山に向かう場面である。また、この文章を踏まえた、芥川龍之介の「芋粥」（一九一六・九）の用例がある。五位と利仁が連れ立って、京の町から粟田口へと向かう場面で、やはり鴨川の流れの形容に用いられている。

冬とは云ひながら、物静に晴れた日で、白けた河原の石の間、潺湲たる水の辺に立枯れてゐる蓬の葉を、ゆする程の風もない。

漱石や芥川の描く「潺湲」たる川音は、むしろ静寂な風景である。いずれをも読み得た谷崎は、「潺湲」の語をどのようにイメージしていたのだろうか。

現在、「前の潺湲亭」は、南北の二つの区画に分かれ、二つの家に建て替えられているが、谷崎の旧居跡である旨の立て札・表示がある。南側の家は個人のすまいであり、北側の家では「京都和とじ館」を営業している。

谷崎の居住当時、「前の潺湲亭」を訪れた記録として、写真家である土門拳の『風貌』（一九五三、アルス）の文章を引用しておこう。訪問は、昭和二十二（一九四七）年九月二十五日、谷崎の肖像写真の撮影のためである。

当時、谷崎先生のお宅は、東山山麓南禅寺の白川の岸に沿ってあった。古い二階家で、「潺湲亭」と書いた扁額が玄関に上がっていた。恐らくその川の淙々たる流れに因んだのだろうが、先生の命名であるかどうかは分らない。――先生の書斎は八畳敷ほどの瀟洒な日本間だった。どことなしに文人趣味の匂いがしていた。尤も、六角形の支那火鉢には電熱器が入っていたし、側にはコーヒー沸しや英字新聞などもあった。窓の下には白川が、疾い瀬音を立てていた。簀子を透して、秋の日差しが机の上の原稿用紙に金色の縞を落していた。四百字詰めの和紙の原稿用紙だった。丹念に毛筆で書いてあった。机

の前には見台が立っていて、やはり毛筆で書いた草稿が載っていた。「細雪」の草稿だった。墨で四角く塗りつぶしたり、書き込んだり、営々たる苦心の跡を止めている草稿だった。

写真家の眼が、文豪の書斎の光景を鋭く捉えている。「細雪」は、戦後、上巻・中巻が昭和二十一（一九四六）年六月と翌年二月に刊行され、下巻は、『婦人公論』に連載（一九四七・三～四八・一〇）された後、二十三年十二月に単行本として刊行される。土門の見た「「細雪」の草稿」は、『婦人公論』に発表する原稿であったと考えられる。

二　「後（のち）の潺湲亭」

『倚松庵の夢』（一九六七・七、中央公論社）に収録されている「銀の盞」において、谷崎松子は、敗戦後の京都生活を次のように回想している。

家の後を白川の流れる、格好の家を南禅寺に見つけて求めたが、夕立にしては激しい雨で白川が氾濫、書斎の床下が傾くやらで、すっかり恐ろしくなって早速人に譲り、漸く買い求めたのが、糺の森の例の瀬見（せみ）の小川の傍に奥深く、ひっそりと、それでも小滝まで懸った林泉のある、

下鴨糺の森（右手に泉川があり、渡って進むと「石村亭」に出る）

真に谷崎の好みにあった庭のある家で、これを潺湲亭と名付けた。

（原題「『源氏』と谷崎潤一郎と私」一九六五・六、『婦人公論』）

下鴨の糺の森について、『京都名勝誌』（一九二八・一一、京都市役所）の文章を引用する。

葵橋に立ちて東北を望めば、本社のある糺の森は森々として老杉古柏の天に沖するを見る。この橋を東に渡り、剣先より北に折れ、行くこと一町ばかりにして一の鳥居に至る。これを過ぎて社地に入れば、左右に小川あり。右即ち東を流るゝを泉川、左即ち西を流るゝを瀬見の小川といふ。水質いづれも清冽なり。

江戸時代には「みな月十九日から晦日に至るまで」、御手洗川（瀬見の小川）のほとりに茶店・出店が並んで、「糺納涼」としてにぎわっていた（秋里籬島『都林泉名勝図会』一七九九年刊）。しかし、竹村俊則『新撰京都名所図会』第三巻「洛中1」（一九六一・一、白川書院）では、「むかし糺の森中をながれる泉川のほとりに茶店を設け、甘瓜・ところてんを冷し、みたらし団子をたべ、夏日に炎暑を避けて遊宴した」としつつ、「いまは御手洗川には水はなく、泉川はその上流が住宅地となつてからは下水と化し、夏日の清遊はしの

「石村亭」母屋の玄関

「石村亭」母屋の和室二間

ぶべくもない」と記されており、昭和三十年代には水の「清冽」も、夏のにぎわいも失われていた時期があったようである。「後の潺湲亭」すなわち「石村亭」は、この糺の森に接し、泉川を渡った東側にある。

「石村亭」についての説明を、日新電機株式会社のホームページから引用する。

石村亭は商家の隠居所として１９０７年（明治40年）頃に建てられたもので、母屋は木造瓦ぶきの平屋建てで書院造りの主室、数寄屋造りの控えの間など10部屋に、離れ（書斎）と茶室が付属し、回遊式の日本庭園には細長い池があり、滝が流れています。敷地面積は約１、９５０㎡です。

敷地内の主要な建物は母屋・書斎（離れ）・茶室で、それを包んで広い庭園がある。「谷崎潤一郎と潺湲亭（現石村亭）」のパンフレットでは、母屋を次のように説明している。

玄関の次の間は八畳で、その奥の主室も八畳ですが二畳分のゆったりした床の間があります。二つの部屋の間には谷崎先生に書いて頂いた「石村亭」の額がかかっています。額には「丁酉春日　潤一郎」と書かれています。丁酉（ひのとり）は昭和三十二年で、当社が潺湲亭を譲り受けた翌

「石村亭」離れ（書斎）の和室と応接室

年にあたります。

主室は庭に面して廻り廊下、欄干があり、外にガラス戸が入っています。南側はわざと日の光を避け、棚を池の面の方にさしかけてあって、谷崎先生ご自慢の野木瓜（むべ）の葉が茂っています。

書斎については、別のパンフレット（「小説『夢の浮橋』の世界　石村亭へようこそ」）に次の説明がある。

離れの書斎には、六畳と八畳の和室が二間あり、東側の奥の間を谷崎先生は仕事場として利用していました。書家・銭痩鉄氏による「潺湲亭」の額が掲げられています。その東側に増築された六畳ほどの応接間があります。東と南は全面ガラス戸で光を取り入れ、洋風な造りの部屋になっていますが、壁や天井の自然素材により落ち着いた雰囲気をかもし出しています。

この「後の潺湲亭」に、谷崎は足かけ八年住んだのである。松子夫人は、戦争中からの谷崎の日々の生活について、次のように証言している。

執筆の時間は、生涯の幕を閉じる四五日前まで厳守され、朝食がすむと直ぐに書斎に入った。こゝで書斎のことで説明を加えると、書斎はサラリーマンの人が会社に

執務していると同じと思って貰いたい。従って余程の急を要する事以外は、書斎に這入ることは快い顔を見せなかった。一つ家であっても、家庭生活と仕事と、判り区別をつけたかったことが私にはよく理解出来た。（中略）神聖な書斎で、先ず書信の整理の後、秘書の人が十時に着くと同時に開始され、十二時五分前に休止、昼食、昼食後お昼寝一時間余、それから又書斎に三時迄籠り、三時には居間に戻ってお八つ、その後は三十分余庭の散歩、又執筆、五時には終了、六時半には夕食をすませ、こゝ二三年は夕食後はベッドに入ってラヂオをきゝながら眠ることが多くなったが、体の調子のよい時には書物を披くこともあった。（「細雪余談」一九六六・四『中央公論』）

「石村亭」を訪れてみると、この谷崎の日常生活がそのまに思い描ける。家庭生活と仕事とを切り離し、執筆活動と休息の交互に交じる一日が、この書斎で、この庭で、この母屋でと、目に浮かぶように想像でき、当時のままに守られていることの大切さが強く感じられた。

この邸宅の起源については、パンフレットに次の記載がある。

明治四十年より少し前に、中京区二条通寺町東の塚本度量衡店の店主・塚本儀助さん（扇子製造業及び貿易商も営む）が隠居所として作った建物で、「東林庵」と名付けられていました。その後、息子・純一さんの代になって、茶室や庭の築山の上の四阿、洋館が建てられました。また庭内の数々の石の羅漢や中門の外の石像が据え付けられ、全容が整ったのは昭和十年前後です。

谷崎は、既に林泉や石材の整った邸宅を購入し、それを楽しんだのである。河野仁昭『谷崎潤一郎　京都への愛着』（一九九二・六、京都新聞社）にさらに詳しい調査がある。

「三つの場合」の第三章「明（あきら）さんの場合（細雪後日譚）」は、「細雪」のモデルとして家族を紹介しつつ、「御牧実（みまきみのる）」のモデルとなった、渡辺明の一生を綴った文章である。「作州津山十万石の藩主、第十四世松平康民の三男」という出自から、青年時代のこと、昭和十六（一九四一）年四月に、松子夫人の妹重子（「細雪」の雪子のモデル）と結婚したこと、戦中戦後の様子、などを記し、昭和二十四（一九四九）年十月の死去までをたどっている。

義妹は明さんの死後、間もなく南禅寺を引き払つて潺湲亭の姉の許で暮らしてゐた。当時四十三歳に達してゐた彼女は、どこまでも明さんの跡を立てる意志であつたが、

松平家に然るべき嗣子を得られないところから、姉の先夫の長男根津清治を養子に迎へ、その配偶者に京都の高折病院長高折隆一氏の長女千萬子（橋本関雪孫娘）を養女に娶った。

「後の潺湲亭」には、一時期、渡辺家一家が同居する。谷崎と妻松子、松子夫人と先夫の娘であり、谷崎の次女として入籍されていた恵美子に加えて、松子の妹の渡辺重子と新婚の清治・千萬子夫婦の計六人が生活を共にしていた。

昭和二六年（一九五一）五月二日に結婚してから、潺湲亭と名づけられた下鴨の家に住むことになりました。以来昭和三〇年春に北白川にうつるまでの約四年間をここで谷崎の家族と共に過ごしました。（渡辺千萬子『落花流水　谷崎潤一郎と祖父関雪の思い出』二〇〇七・四、岩波書店）

新婚生活をふり返って、千萬子は、次のように記す。

潺湲亭の庭は六〇〇坪あって非常に凝った贅を尽くした庭ですが、私は子供の頃には白沙村荘に住んでいたことがありました。あれは三〇〇〇坪くらいはありますから、大きい小さいとか優劣の問題ではなくて、すごい所に嫁に来た、とかそういう意識は全くありませんでした。ですから松子にしても殊に重子にしてみれば、平然と別に有難がりもしなければ恐れもしないで、当たり前みたいに平気で暮らしている小生意気な娘だと思ったのではないでしょうか。

（同前）

昭和二十七（一九五二）年の正月に、谷崎は、「妻いもうと娘花嫁われを囲むみづのえ辰の元日の朝」という和歌を詠んでいる。そして、清治と千萬子との間には、昭和二十八（一九五三）年二月に、娘たをりが生まれている。結婚と離婚を繰り返してきた谷崎にとって、一時ではあったが、家族だんらんの日々が、ここで実現していたといえる。

昭和二十五（一九五〇）年二月、谷崎は熱海に別荘（「前の雪後庵」）を購入し、冬には京都の寒さを避けて熱海に住むという往復生活を始める。昭和二十七（一九五二）年には高血圧症を悪化させて病臥。十月に「いつそ気分転換のために京都の家に帰」ろうとした経緯が「高血圧症の思ひ出」（一九五九・四～六『週刊新潮』）に記されているが、この文章からは、谷崎が「後の潺湲亭」に寄せていた並々ならぬ愛着が感じられる。

私は俄かに下鴨の邸の閑寂さが恋ひしくてならなくなつた。（中略）（私は）この庭を限りなく愛し、毎年春と秋とには欠かさずこゝに戻つて過す習慣になつてゐた。滝

「石村亭」母屋の廻り廊下から見た庭

があり池があるので、冬は寒く、湿気が多いところから、冬を越すことはめつたになかつたが、この庭の雪景色の素晴らしさも知らないではなかつた。（中略）午後八時京都駅に着いたが、ホームに降りると忽ち又猛烈な眩暈を覚え、到底一歩も歩けなかつた。依つて迎ひに出てゐた運送店の主人に背負はれてブリツジを渡り、辛うじて潺湲亭に入つた。そして滝の音を耳にしながら、久し振に味はふ京都料理を口にしてゐると、全く熱海とは違ふ別天地に来たやうに感じ、その夜は心から安眠した。

しかし、昭和三十一（一九五六）年十二月、谷崎は心を残しながらも、「後の潺湲亭」を手放し、日新電機に譲渡する。パンフレットには、次のように記されている。

谷崎先生の夫人・松子さんと、当時の田中常務（後に専務）の夫人・静子さんが女学校の同級であったことから、接待寮として譲り受けました。その際、「京都に来た時は見にきたいので、できればなるべく現状のまま使ってもらいたい。」とのお話がありました。

先に述べたように、谷崎が書斎にしていた離れには、今も、玄関の入り口と八畳の間とに、銭瘦鉄揮毫の「潺湲亭」の扁額が掲げられているが、これらの額は、「熱海の「雪後庵」

「石村亭」邸内図（パンフレットによる）

に転居された際に持って行かれましたが、翌年の春にわざわざ石村亭に持参して頂きました」という。

谷崎は、「京都に住んでゐた時、私は下鴨の邸を「潺湲亭」と号してゐたが、熱海に移つてからは庭の中に水の流れを取り入れることが出来なかつたので、「潺湲亭」の名を廃して「雪後庵」と呼ぶことにした。ちやうどその頃単行本の「細雪」が大いに売れ、その印税で伊豆山の土地家屋を手に入れたので、それを記念するために「雪後」の文字を用ひたのである」（「京羽二重」一九六三・八『新潮』）と述べているが、大切な扁額を「石村亭」に戻しに来たとき、「潺湲亭」の額はここに置く方がよいという思いがあったのだろう。同時に、ある諦念が心を占めていたのかもしれない。

「後の潺湲亭」を離れてのち、谷崎は、「夢の浮橋」（一九五九・一〇、『中央公論』）において、そのたたずまいを作品の舞台に移して用いる。ここにも、「後の潺湲亭」への強い愛着がうかがわれる。

最晩年の谷崎に、「京都を想ふ」（一九六二・十二『毎日新聞』）の文章がある。

あのまゝあの糺の森にゐればよかつたと、今でもときゞさう思ふ。さうしたら京都のあの気候にも馴れ、毎

糺の森の泉川に架かる石橋（右手に行くと「石村亭」）

日々々京都でなければ口に出来ないおいしい物を食べて暮らして行けたのにと、よくさう思ふ。それほど好きな京都を見捨てた主な理由、いや、唯一の理由は、あの溜まらない夏の暑さと冬の底冷えである。殊に糺の森の家は鴨川と高野川とに挟まれ、池や滝があったりしたので湿気が多く、江戸育ちの老人の健康のためには最も不向きであった。

昭和四十（一九六五）年七月、谷崎は七十九歳で生涯を閉じる。

その後の「後の潺湲亭」にかかわる二つのシーンを見ておきたい。まず、松子夫人の「追想」の文章である。

十一月三十日、今年の最終の墓参に京都へ立つ。（中略）糺の森に。泉川の石橋に立つてゐると雪がふゞく。川のせゝらぎの音は住みし日と変らない。川辺に積る落葉と木に残る紅葉と映え合ふ。ふゞく雪の中に落葉も交り合つてゐる。（中略）泉川の、そのかみは瀬見の小川とよばれた上手の社殿の方から雪にかき消されながら現れて来る人影に散歩姿の夫を思ふ。潺湲亭を眼で追ひつゝこの森を離れ、鷹ヶ峰の光悦寺へゆく。

（『湘竹居追想』、一九八三・六、中央公論社）

松子夫人においても、「後の潺湲亭」への思いは、深く重い。糺の森の泉川のほとりで川の水音を聞いていると、私たちも、亡き谷崎の面影を追いたい気がした。

もう一つ見ておきたいのは、「久し振りに潺湲亭を訪ね」た後に書かれた、渡辺千萬子の感慨である。

ここは私が結婚してから三年余り住んでいたところです。当時のまま殆ど変わらずに庭も屋敷も残っています。ここへ来ると何と言うか言葉にするには複雑で、なつかしいと思う気持ちと精一杯生きていた若い自分を見る心地がして少し胸の奥が痛くなるのです。あまり来たことは無く四十年の間にこれで三回目でしょうか。

千萬子は、「潺湲亭」の扁額のことにふれて、「ここに住んで居た時には全く気が付かなかったのですか、後に、それも何十年も経ってからその作者を見て愕然としてしまいました」という。

銭瘦鉄氏は中国の著名な篆刻の名手で、画家である祖父の落款は殆ど銭氏の手になると聞いています。日本に来られた時は何ヶ月か祖父の家に滞在されるのが常だったといつも母から聞かされていました。そんな訳でお目にかかったことは無いのですが「銭さん」という名前はよく知っていましたので、この「於白沙邨荘」の文字を見た時、何か目に見えない力に絡めとられ操られて、私はここに連れてこられたのではなかったのかと、背筋が冷たくなるような不思議な想いに立ちすくんでしまいました。

（「『潺湲亭』のこと（後の潺湲亭）」、『谷崎潤一郎＝渡辺千萬子往復書簡』、二〇〇一・二、中央公論新社、所収）

千萬子は、清治との新婚生活において、夫婦のつながりというよこ糸だけではなく、谷崎とのつながりという大きなたて糸があることを意識していた。そのたて糸が、ひいては、『往復書簡』をも作り上げたといえる。しかし、そのたて糸に絡むようにして、祖父橋本関雪からの糸も織り込まれていたことには、ずっと後になってはじめて気がつくのである。

「後の潺湲亭」には、いまも谷崎とその家族の思いが揺曳しているように思う。その場所が谷崎が生活していた時のままに残っているということがどれほど貴重なことであるのか、ここを訪れて強く考えさせられた。

――武田美穂は本専攻中退――